関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

北京孔子廟について ： 孔子廟研究に於ける意味づけ

著者	小林 和彦
雑誌名	關西大學中國文學會紀要
巻	28
ページ	119-143
発行年	2007-03-20
その他のタイトル	A historical role of Peicheng K'ung tzu miao (北京孔子廟) : the meaning in Confucius' Temple Study
URL	http://hdl.handle.net/10112/12876

北京孔子廟について

——孔子廟研究に於ける意味づけ——

小林和彦

一　序

儒教[1]とは何か、儒教文化をどの様に規定したらよいのか[2]、この問題を解明するに当って様々な論究が試みられて来たが、見逃してならないのは、儒教がどの様なあり方をしたのか、ということであろう。

その際、孔子廟及びそれに伴う儒教のあり方、とりわけ孔子廟の持つ意味及び釈奠、儒教教育の持つ意義を解明することが重要事であることは言を俟つまでもないことであろう。

そうした意味で一九九五年五月に北京で中国孔廟保護協会が結成され[3]、二〇〇四年にその成果が発表されたのは[4]意義深いことであった。

しかし、本稿で論述する北京孔子廟（以下、北京孔廟と表記）は、占地面積約二二〇〇〇平方キロメートルを占め[5]、曲阜孔子廟と並んで中国二大孔子廟であるにもかかわらず論述されていない。我国に於ても中野江漢氏が考察し

ているが、[6] 孔子廟研究に於ける意味づけはされていない様である。それ以外には、かつて篤志家によって旅行記等で簡単に紹介されているが、[7] ほとんど考察は加えられていない。

北京孔廟の持つ意義を論じるに当って、一般的に孔子廟の持つ性格を考えると、凡そ次の四種類に大別される。

即ち(1)孔子家の家廟　(2)家廟の要素を残しながらも、国家的な性格が強いもの　(3)官学として地方の儒教教育を担ったもの　(4)篤志家によって建立され、有志によって支えられたもの[8] である。論述に当って、主として曲阜孔子廟を視野に入れてその意味について述べてみたい、と思う。

二　北京孔廟の構成

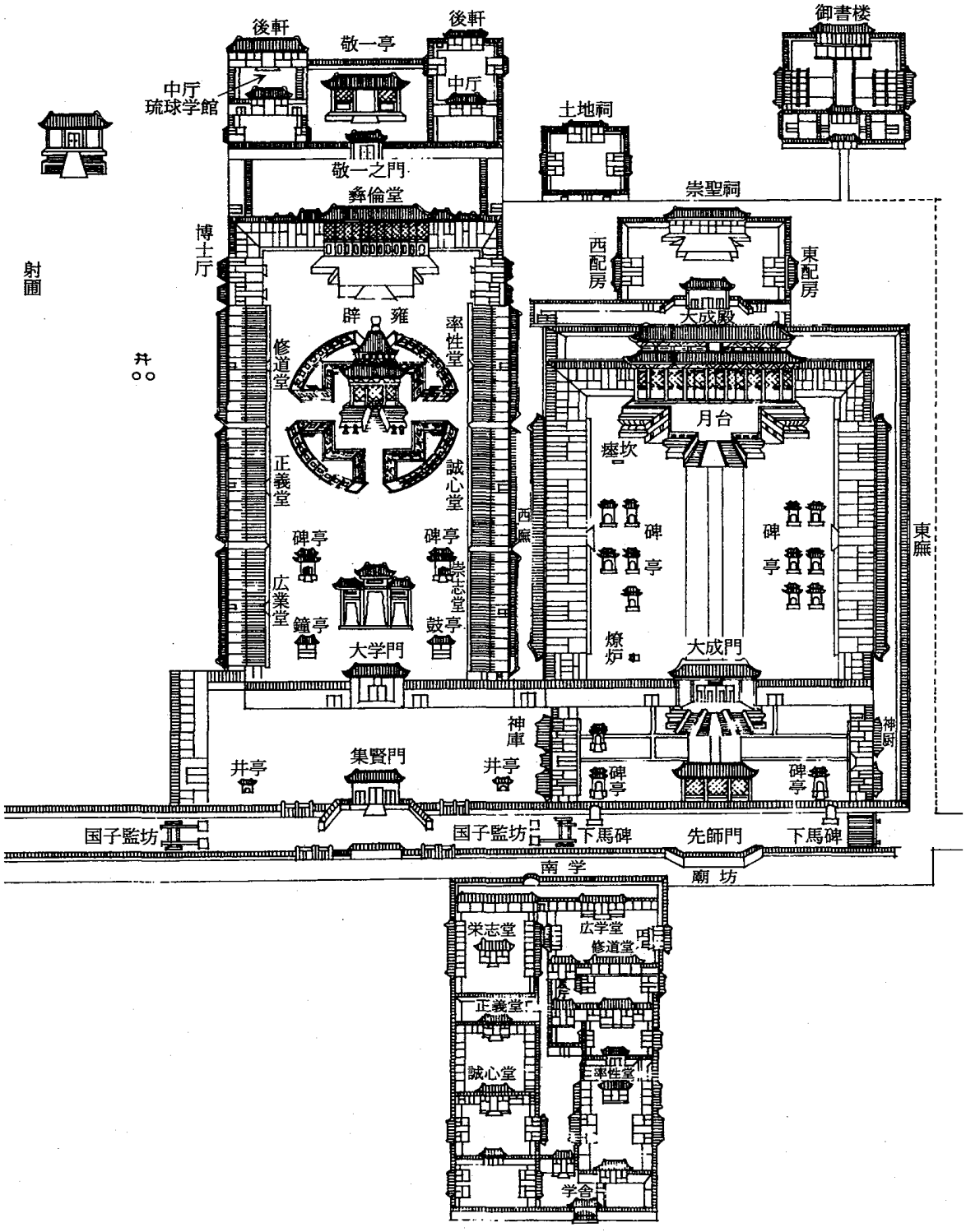
筆者は一九九〇年（平成二年）はじめて北京孔廟を訪れた。そして二〇〇二年と二〇〇六年の二回に亘って調査を行った。但し、二〇〇六年は工業中であったので、大成殿を含めて十分な調査は不可能であったが、幸い二〇〇二年は一定調査が可能であったので、[9] 諸文献、特に先述の一九〇〇年代前半に北京孔廟を訪れた先学の記録、中野江漢氏の考察、また孫承澤『春明夢餘録』、朱彝尊『欽定日下旧聞考』[10] 等をはじめとする歴史的文献によりながら、可能な限り、その構成を通して概説を試みたい、と思う。

北京孔廟は北京市東城区安定門内の成賢街に南面して建てられ、国子監と一体となっている。

次の図は清代の北京孔廟の構成図である。

孔子廟と学校（国子監、書院等）は唐の咸亨元年（六七〇）以降合せて一つとする様になり、[11] その形式は個別的な状況も存在するが、次の三種類の変形と考えられる。

清北京国子監孔廟図《欽定大清会典図》



南京工学院建築系・曲阜文物管理委員会合著『曲阜孔廟建築』
（中国建築工業出版社　1987年）より
但し，筆者にて一部加筆・削除

即ち(イ)前に孔子廟、後に学校　(ロ)左に孔子廟、右に学校　(ハ)右に孔子廟、左に学校　であり、[12]北京孔廟は(ロ)の形式である。[13]（尚、創建時は崇聖祠、南学は未建、経緯については後述）

北京孔廟の創建について述べると、孔廟内の「乾隆帝御製重修文廟記」等による元の太祖の創立にかかわる説、元の太宗創設説、『元史』世祖本紀等による元の世祖創設説　の三説があるが、[14]筆者は成宗大徳六年（一三〇二）に正式に決定され大徳一〇年に竣工されたと考えるのが良いと考えている。[15]

現在の場所にある北京孔廟は元末の荒廃のため明の永楽元年（一四〇三）に遷されたものが基になっており、[16]明の洪武一四年国学文廟として建てられたものである。[17]その後、明の永楽九年（一四一一）の大成殿の修繕、宣徳四年（一四二九）の大成殿及び両廡の修整、嘉靖九年（一五三〇）の啓聖祠の新建、清の乾隆二三年（一七五八）の重修、光緒三二年（一九〇六）の大成殿の修繕、そして中華民国五年（一九一六）（以下、民国と表記）までに増建、改築されて今日に至っている。

三院落より構成されているが、大別すると先師門から大成殿までが所謂前院（第一院落）[18]ともいうべき場所である。次に大成門から、東、西両廡が存在する区域が本院（第二院落）にあたる部分である。そして大成殿の奥の崇聖門、崇聖祠が後院（第三院落）にあたる部分で、三院落より成っている。[19]

以下、前院、本院、後院の順に記述していくことにしたい。

前院の前の通りは国子監、または成賢街と呼ばれ、東端に成賢街と書かれた牌坊が建っている。西側に向かうと先師門に至るが、途中に「官員等此に至りては下馬せよ」と書かれた清代に建立された下馬碑がある。碑文はその両面に漢語以外に蒙古、ウイグル、トド、チベットの各文字で書かれており、これより先は聖域とされている。[20]

先へ進むと先師門に至る。皇帝が先ず靈星を祭るための孔子廟の第一門を櫺星門と称し、北京孔廟で俗称されているが、現在のものは乾隆三三年（一七六八）の重修後、先師門と命名された。先師門と称したのは、清の順治一四年（一六五七）に孔子に至聖先師と改追贈したのによった、と考えられる。

先師門から大成門に至る空間が前院にあたる部分で、皇帝来廟時、儀式の準備をした場所にあたる。そして向かって左側の神庫、及び右側の神厨はその際に祭器の管理、及び調理を行った場所である。

その前に二つの碑亭があるが、先師門より東側の内側に近い方から乾隆三四年（一七六九）、その後方のものは道光九年（一八二九）建立である。反対側の碑亭は明の英宗時代（一四三五～四九）建立である。[21] また前院には四ヵ所に分かれて元から清までの進士題名碑が存在するが、その意味については後述する。

先師門の先が大成門である。これは『孟子』万章下篇の「孔子之を集めて大成すと謂う」によって、孔子の徳を称えたもので、門の前と後ろに三つの階段がある。中央は螭階で、両側は一三階の階段である。

そして、その左右に五個ずつの石鼓がある。石鼓とは一般的には周の宣王の時代のものと伝えられている籀文（ちゅうぶん）とよく似ているところから、そう考えられている。諸説あるが、東周時代の秦の刻石で、韓愈が「辞は厳に義は密にして、読めども暁り難し」と述べている様に、その文章はかなり難解である。[22]

この石鼓は唐初、陳倉（陝西省鳳翔県）の田野から発見されたものといわれ、宋の大観年間（一一〇七～一〇）に汴京の大学に置かれた。その後宮中の保和殿に置かれ、元の皇慶二年（一三一三）に北京孔廟に移されたものである。[23] 現在は国の一級文物として北京の故宮博物院に所蔵されており、北京孔廟内のものは乾隆年間の模造品である。そして西側の石鼓の前には張照の筆になる韓愈の石鼓の歌を刻した「石鼓歌碑」が立っている。[24]

この大成門から大成殿に至る区域が本院である。その大成殿の前には一九九三年に建立された楊清欽の寄贈になる孔子像（先師行教像）が建っている。これは明の嘉靖九年（一五三〇）以降の北京孔廟の歴史的経過からして現在唯一の孔子像と思われる。

大成門から月台（露台）へ向かって神道が続いており、その東に六亭、西に五亭、合せて十一の碑亭がある。その内、碑文の摩滅等の理由により、建立が判明しているのは康熙時代（一六六二～一七二二）、雍正時代（一七二三～三五）各二亭、乾隆時代（一七三六～九五）一亭で、その他は不明である。[25]

碑亭建立の目的は王朝が「御製平定回彊　捦逆裔告成太学碑」の様に全土掌握のための戦功を示すためや、「大成至聖文宣王加封勅碑」の様に、孔子廟の修理と皇帝が「辟雍」で孔子を祭ることを示すためであった。特に「御製平定両金川告成碑」は上部は皇帝をあらわす龍が彫刻され、下部は海の波が彫刻された正方形になっている。そしてその四角に亀、魚、蝦（えび）、蟹が配され、天円地方を象徴し、皇帝が天上及び地上を支配することを示すものであった。また大成殿の東前方には元の大徳一一年（一三〇七）孔子を大成至聖文宣王に封じたことを示す「孔子加号碑」が建てられており、同時に皇帝の権威を示すものであった。

月台の奥が大成殿である。現在のものは明の永楽年間に再建され、清の光緒三二年（一九〇六）に七間三棟から、九間五棟に増築され、その後修繕を経たものである。頂上の構造は二重の廂を持ち四坡五棟で、その上に黄色の瑠璃瓦を敷いたものである。[26] その中央に「至聖先師孔子神位」と書かれた木主がある。詳しくは次のページの様である。

四配、一二哲の配置は曲阜孔子廟と同じであるが、乾隆四年（一七三九）に一二哲が完成しているので、創立時は有若と朱子を除いた十哲であった。現在の配置は清代のものであるので、曲阜孔子廟と同一であるが、異なる点は木

正享
至聖先師孔子神位
七十二賢像
聖神天縱
中和位育
中時協聖
先賢冉子之位（冉耕）
先賢宰子之位
先賢冉子之位（冉求）
先賢言子之位
先賢顓孫之位
先賢朱子之位
西哲
參地天興
西配
宗聖曾子之位
亞聖孟子之位
道大洽道
有未民生
東配
復聖顏子之位
述聖思子之位
成大集聖
七十二賢像
載物德
東哲
先賢閔子之位
先賢冉子之位（冉雍）
先賢端木子之位
先賢仲子之位
先賢卜子之位
先賢有子之位
茲在文斯
萬世師表（匾額）

主であることである。

木主に替えたのは明の世宗に対する張璁の建議によるもので、[27]それまでは創立時以来塑像が配置されていた、と考えられる。

漢代には孔子図像を描くことが行なわれたが、孔子像は確かに北魏の時代には存在し、東魏の興和三年（五四一）に李珽によってはじめて祭られた様である。[28]しかし、程頤、朱子は孔子像の設置に懐疑的であり、その弟子の陳淳も偶像拝崇自体に反対であった。[29]

明の邱濬は『大学衍義補』巻六五　に於て孔子像は仏教の影響であること、孔子生時の盛徳の容貌を表現することが不可能であること、名分上から言っても過って居る等の理由で反対した。そして明の世宗嘉靖九年（一五三〇）に張璁の議に従って孔子廟の塑像を撤去した。更に孔子の門人の顔回、曾参、孔子の父親が廡に従祀されているのは不敬だとして崇聖祠を建て、叔梁紇以下、顔路、孔鯛等を従祀した。そして「至聖先師孔子神位」と題した神位牌としての木主を用いた。[30]しかし、曲阜孔子廟は家廟としての性格が強く毀されなかったが、主な孔子廟からは撤去され、基本的にはそうであったが、[31]一部の孔子廟では置かれた場合があり、徹底されたものではなかった様である。[32]

もう一つは孔子の木主の左右に分けて七二の塑像が置かれていることである。

元時代の創立時には東西廡には一〇四人の神位が従祀されていたが、その後許衡と董仲舒が追祀された。[33]七二賢像が大成殿内に置かれているのは、北京孔廟が一九八一年以来、首都博物館として廡が北京歴史文物陳列展の会場として使用されているためであろう、と思われる。

しかし、清時代にはもちろん、少なくとも民国初期[34]までは七二賢をはじめ先賢、先儒が従祀されていた。[35]

西廡と隣接して東隣の国子監との間に十三経の石経がある。これは清の雍正年間に、江蘇省全壇の貢生蒋衡が西安で「開成石経」が多くの人によってむやみに書かれていることを遺憾に思って、自らの手で経典を写そうと決心し雍正四年（一七二六）から乾隆二年（一七三七）まで一二年かけて彼一人の楷書によって写されたものである。字体は雄勁なものであり、乾隆五九年（一七九四）碑に刻まれ、太学の両廡にあったが、一九五六年現在の場所に移された。[36]

しかし、北京孔廟の最も重要な特徴は、至順二年（一三三一）に角楼が設けられたこと、及び前院に元の皇慶二年（一三一三）にはじめて建立され、以後元の三基を含んで明の七七基、清の光緒三〇年（一九〇四）の科挙までの一一八基に一六二四名の進士名が記された進士題名碑が存在することである。[37] これは北京孔廟研究に於ける意味を決定づけるものであり、その意味については後述したい。

次の大成殿の奥の崇聖祠を中心とする地域が後院（第三院落）である。この院の特徴は前院、本院が皇帝が来廟する際に使用する公的な要素が強いのに対して、皇帝が立ち入らない区域で、孔子家の私的空間といった色彩が強い。

その中心は崇聖祠で、既述の様に嘉靖九年に建立され、叔梁紇（孔子の父）をはじめ防叔（伯夏の父）、木金父（孔祈父の父）、祈父（防叔の父）、伯夏（叔梁紇の父）が供奉されている。

東配房は孔子と特に深い関係がある五人、つまり孔孟皮（孔子の兄）、曾點（曾子の父）、孟孫激（孟子の父）が、また西配房には顔無繇（顔回の父）、孔鯉（孔子の子供）が供奉されていた。[38]

以上、概略であるが、北京孔廟の構成の記述としたい、と思う。

三　北京孔廟の歴史及び意味づけ

北京孔廟の意味づけを考えるに当って重要なことは、歴史的経緯よりすると、明の嘉靖九年、その形が備わり[39]、永楽二年（一四〇四）に至って大いに整ったのであるが[40]、左に孔子廟、右に学校で、国子監とは前院の持敬門によって通じている様に両者一体となっていることである[41]。

元代の国子監の大きさは南門から彝倫堂までの間であったが[42]、現在総面積三万平方キロメートルを有しており、至元六年（一二六九）に国子学と称し、北京孔廟が竣工した大徳一〇年に開設された。明代には最高学府として南京に設けられた南監と共に北監と称された[43]。元代は最も多い時でも国子生は四百余人であったが[44]、明代では約一万人に達し[45]、元、明、清三代を通じて教学の中心であった。

その構成は北京孔廟とほぼ同一で、集賢門から太学門までの前院、太学門から国子監の蔵書所で、元代の崇文閣の跡地に明の永楽年間に再建された彝倫堂までの本院、彝倫堂から後の後院に分けられる。

勿論その中心は本院であるが、特に注目すべきは乾隆四九年（一七八四）建造の琉璃牌坊である。南面に乾隆帝の手になる「圜橋教澤」の文字が書かれ、その反対面には「學海節觀」とあり、教育の重視が示されている。初代監主は許衡であった。朱子学は元の前の金王朝下に於て、書籍が金国内に伝わり、科挙に於ても受け入れられ、その影響は強かった様である[46]。そして元に於ても朱子学は受け入れられ、許衡は深く朱子学を受け入れ、徹底した朱子学による教育が施された。そして、清代以来、大規模な祭祀活動が仲春上旬の丁日と仲秋上旬の丁日に二回行なわれた。それが所謂「上丁祭孔」である[47]。従って、皇帝がしばしば来廟したのは、当然のことであった。

元時代の主な釈奠（孔子崇拝儀礼）はわずかに四回であるが、明時代には約一四回とかなり増加している。[48] 基本的には元、明時代には各皇帝が来廟し釈奠を行なうわけではなかったが、清時代になると各皇帝が釈奠の礼を行なっており、[49] その主なものだけでも、清時代は実に二六回に及んでいる。

順治帝は九年（一六五二）、一七年で、康熙帝は康熙八年（一六六九）の一回であるが、乾隆帝は一〇回に及び、それは三年（一七三八）、五年、九年、一八年、二一年、三四年、四八年、五〇年、五五年、六〇年である。次の雍正帝は五回で、それは雍正二年（一七二四）、四年、六年、七年、一一年、下って嘉慶帝は六回で嘉慶元年（一七九六）、三年、七年、一六年、二二年、二五年であり、道光帝は道光三年（一八二三）、九年の二回である。[50]

また康熙帝の「萬世師表」の匾額をはじめとして「生民未有」（雍正帝）、「與天地参」（乾隆帝）、「聖集大成」（嘉慶帝）、「聖協時中」（道光帝）、「徳斉帱載」（咸豊帝）、「聖神天縦」（同治帝）、「斯文在茲」（光緒帝）、宣統帝の「中和位育」までたて続けに九枚の匾額が大成殿に挙げられた。[51]

更に清朝は一九〇〇年（光緒二六年）の義和国事件以後、政治改革を迫られ、その一環として「尊孔」が国家の大号命となり、光緒三二年（一九〇六）、孔子祭祀は従来の中祀から大祀となった。[52] 従って北京孔廟に於ても甚だ厳粛かつ詳密になり、迎神、初献、亜献、終献、撤饌、送神からなる祭礼が行なわれた。[53] こうして釈奠が行なわれたが、孔子祭祀儀礼としての釈奠は、儒教の宗教性を最もよくあらわすものであった。[54]

しかし、北京孔廟の持つ最大の意味は前院に進士題名碑が存在することである。

孔子廟に対して、少なくとも唐代には一種の尊崇の念があったことは確かで、我が国の遣唐使が皇帝に謁見した後、孔子廟に詣でる習慣があり、[55] また科挙合格者が孔子廟に謁し、孔子の像に礼拝し、慈恩寺の大雁塔の石の壁に各自が

自分の名前を書いた。やがて仲間うちの名筆家を選んで文字を書かせる様になり、更に後人が消えない様に鑿でほり込んだ。[56] そしてこれは宋代にも引き継がれ、朱子は紹興一七年（一一四七）、都の杭州で科挙に合格し同進士出身の称号を与えられているが、合格者は国子監に赴き、題名石を礼部貢院に立てている。[57] 元代以降、北京孔廟をはじめ、[58] 孔子廟にその名を刻する様になったのはその影響である。[59]

元代は科挙廃止に見るように一般的には儒学軽視の時代と考えられがちであるが、実際はその逆で、政治的にも科挙廃止に伴う官吏登用に中国人と蒙古人との間に確執が存在する一面があったとはいえ、仁宗の延祐二年（一三一五）科挙が再開された様に、[60] 中国支配のため儒教を積極的に取り入れる必要があった。そのため儒者に対して免疫の特権を与え、儒戸の子弟を学校に入れ、儒学を修得させることを義務づけ、儒戸の形成による儒者の世襲、知識階級の育成を図った。[61]

元代の廟学は孔子廟を精神的中枢とした教育施設で唐以後の廟学と何ら変わることなく、最も伝統的な官学的な要素が強く、[62] 北京孔廟内の進士題名碑は元の皇慶二年（一三一三）にはじめて建てられ、以後、明、清に及ぶまで一九八基に及んでいる。明初南京国子監に進士名碑が存在したり、明の弘治一六年（一五〇三）の「状元記碑」が西安孔子廟に建立されていることや、元以来上海文廟内の尊経閣横の進士碑廊に壁面に科挙合格者の名を記すこと等が行なわれたが、北京孔廟内の進士題名碑は中国最大のものであり、科挙との結びつきが深い、といえよう。

四　北京孔廟と東アジア

孔子廟は中国で発祥し、儒教と共に広く東アジア地域に広がり、儒教文化を形成したが、本項では北京孔廟が琉球、

日本、ヴェトナムに与えた影響の一端について論述したい。

北京孔廟を論じる際、国子監と一体のものとして考えなければならないことは既述したが、琉球に与えた影響という意味では、国子監内の敬一亭の西側に琉球館が存在することである。

琉球は明代以降二年一貢のペースで入朝し、その回数は一七一回にのぼり、二位の安南（ヴェトナム）に比べても二倍に近い数字であった。[63] そしてそれは清朝に於ても受けつがれ、特殊な状況が発生しない限り維持された。[64]

琉球と国子監の関係は洪武二五年（一三九二）に中山王察度が国子監に入学させるため王子日孜毎、闊八馬らを送ることを請願し、洪武帝が許可したことにはじまり、以後これが定例となった。続いて嘉靖五年（一五二六）、一七年、二九年に官生の入学が行なわれた。

清朝は明代の制度を踏襲し、康熙二三年（一六八四）に行なわれたのが最初で、清末の同治一二年（一八七三）に至るまで、九回にわたって四九人の琉球官生が入学した。清朝政府は厚遇し、雍正年間（一七二三～三五）に新たに南学を建てて、国子監生の宿舎とし、それは清代末まで続いた。

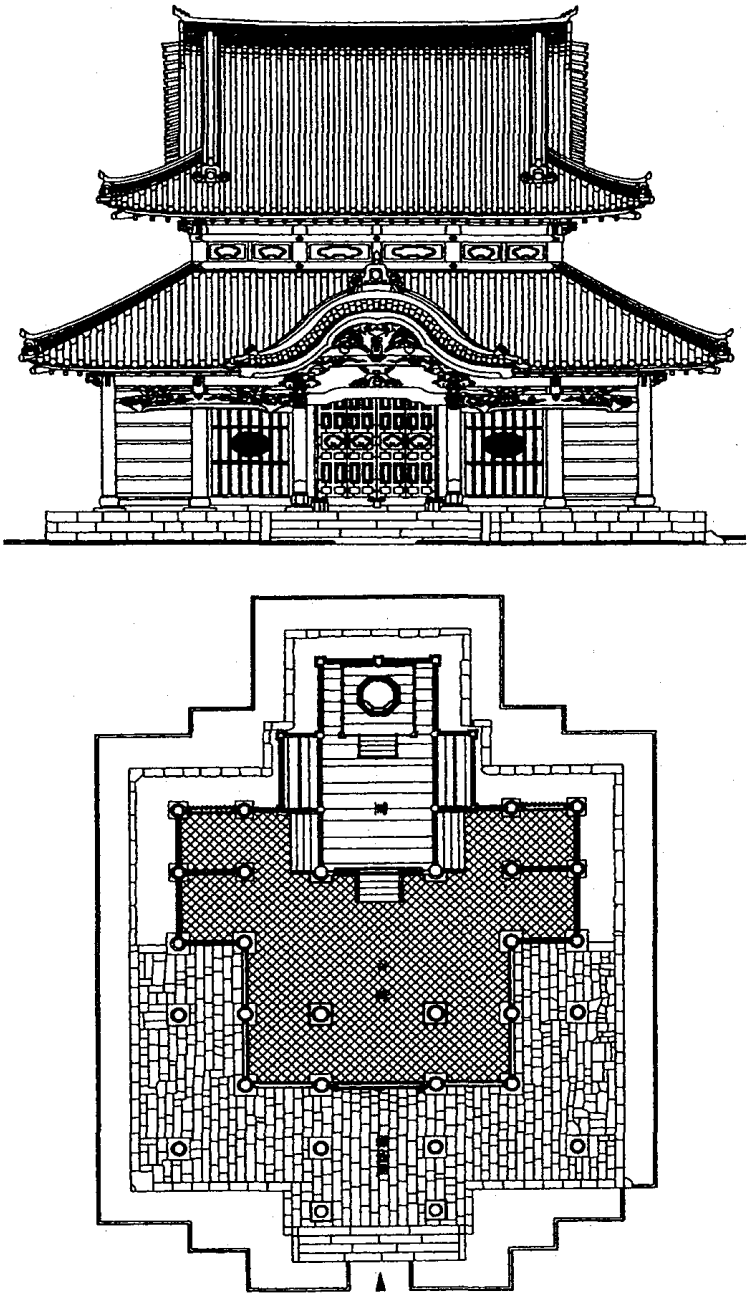
琉球官生の主要な課程は儒家の教典であり、啓蒙のためまず『小学』を学び、その後四書を基礎として学んだ様に、朱子学を中心としたものであった。そして、毎月の一日と一五日には服装を正し、他の貢生に随って孔子廟に行き、三跪九叩の礼を行なった。[65]

彼らは帰国後、儒教教育の普及に貢献した。康熙一三年（一六七四）那覇に孔子廟が建立されたのは勿論であるが、第二尚氏王朝の尚温四年（一七九八年　寛政一〇年）に首里に学校（後に国学と改称）を設けた。[66] 国学の学習内容は北京国子監と同様朱子学一辺倒であり、朱子の「白鹿洞教条」や「程董二先生学則」等を掲げた。また釈奠も日本の

各藩に比べて最も威儀盛大であった。[67] また国子監に於て琉球ばかりでなく日本・暹羅（タイ）等の留学生も学んだ。[68]

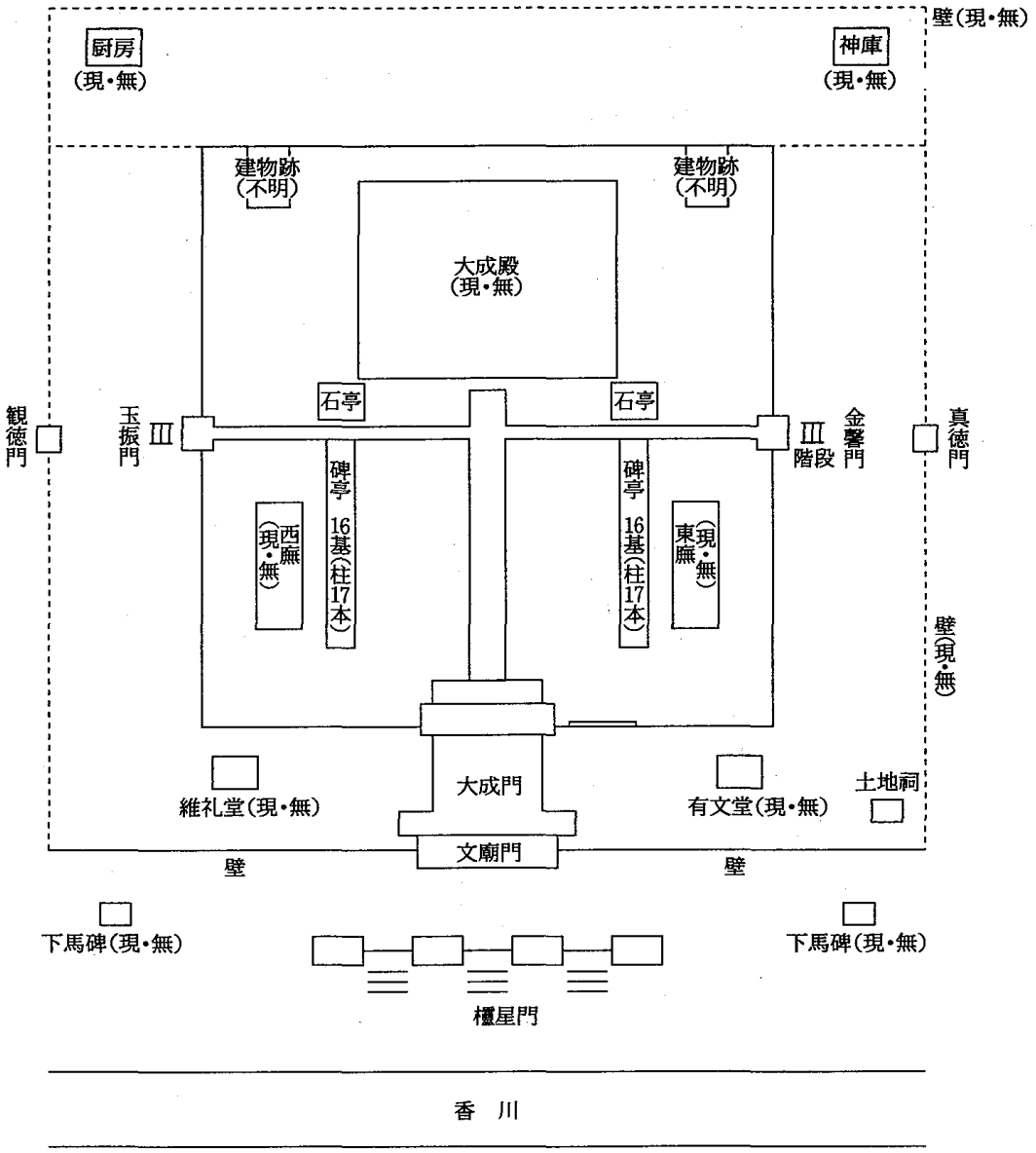
北京孔廟は明清時代の孔子廟建築様式を代表しており、日本への影響については佐賀県・多久聖廟に見ることができる。多久聖廟は我が国三大孔子廟の一つで、宝永五年（一七〇八）、多久茂文によって建立されたが、大成殿の構成が北京孔廟と極めてよく一致している。次図は多久聖廟図であるが、同形式の中庭に屋蓋を架したものと思われる。つまり聖廟の北部突出部は大成殿にあたり、その前は月台（露台）にあたる張り出し部をつくり、その左右に四哲（四配）を祀った。所謂先賢、先儒の従祀はないが、東西のもこし突出部が両廡にあたる。それに接して神厨、神庫

多久聖廟図



『重要文化財　多久聖廟保存修理工事報告書』
（多久市　1991年）より

フエ文廟図



(壁部の点線部は現存していない部分)

が離して作られており、北京孔廟の配置を凝縮したものと思われる。(69)

ヴェトナムに於て初めて孔子廟が創立されたのは李朝聖宗の神武二年(一〇七〇)、ハノイに於てであった。そして、一九世紀初期成立の阮王朝は都をフエに定めた。加えて李王朝と異なり儒教を国是としたため、ハノイ文廟とは別にフエに孔子廟を建立する必要に迫られていた。それが嘉隆七年(一八〇八)に建立されたフエ文廟である。フエ文廟はヴェトナム戦争のため

破壊されたが、その構成は知ることができる。前図がそれである。[70]

一見して明らかな様に文廟門から大成門までが北京孔廟の前院に、大成門から大成殿までが本院にあたることが知られる。大成殿の後方の神庫と厨房は北京孔廟では前院に存在し、後院にあたる部分が存在しない。しかし、後院は元代、北京孔廟創建時には存在せず、明代の増建によることを考えるとより創建時の形を止めている、といえよう。

そして何よりも神道の左右にある三二基の石碑によって明命三年（一八二二）から成泰二三年（一九一一）までの科挙合格者の名前を知ることができる点であろう、と思われる。

それによると、フエでは三九回科挙が実施され、合格者は約二五〇名であったことが解かる。

勿論、ハノイ文廟に於ても科挙合格への奮起を促すために合格者名を記した石碑を建立した。それによってハノイに於て太宝三年（一四四二）から泰徳二年（一七七九）までに、合計一一七回の科挙が行なわれ、合格者約一三〇〇名の名前を知ることができる。フエ文廟の科挙合格者碑文をハノイ文廟の流れの中にある、と位置づけることもできるが、既述の様に当時ヴェトナムは琉球に次ぐ中国への朝貢国であり、また孔子廟の構造も(イ)の前に文廟、後に学校の形を取ったハノイ文廟と異にし、(ハ)の右廟左学の構成を取り、[71] 北京孔廟の構成に近く孔子廟建立時から科挙を実施し、科挙合格者の氏名を刻んだ石碑を建立したこと等[72]北京孔廟の性格（後述）と共通する要素を見い出すことができる。

五　結　語

民国に入ってからの北京孔廟のあり方は清朝までのそれに加えて、孔子の教えを中心とした儒教（孔子教）の持つ

性格と大きな関係を有している。

それは民国初期孔教反対運動がおこり、孔子廟は四川省、江蘇省や上海等に於て打毀の危機や荒廃にさらされたが、[73]中国人が諸外国との政治的な要因のためとはいえ、他の文化現象から截別された独自の領域として宗教を意識する様になったのは清末からであった。[74]

そして康有為は先進諸外国と肩をならべるため、儒教を宗教と解し、孔子廟、祀孔等にその役割をになわせようとした。[75]従って康有為の弟子の陳煩章が民国元年（一九一二）一〇月、上海山東会館で孔教会を創立し、翌年九月北京国子監で秋丁祀孔祭を挙行したのは一連の動きであった、と解することができる。主祭者の内には袁世凱特派の衆議院議長であった梁士詒が含まれており、参加者数千人という盛会であった。孔教会が第一目標として掲げたのは、孔教を国教とすることであった。[76]それは孔教の宗教性を含む問題として議論された。[77]

その後、民国三年九月二八日の上丁の日に袁世凱が北京孔廟で釈奠を行なった。[78]これは袁の皇帝就任への布石であった、と思われる。[79]これは一旦は帝位についたものの三ヵ月足らずで挫折したが、民国六年（一九一七）に黎元洪大総統が『易経』と『礼記』によったと考えられる「道は大道に洽し（あまね）（道洽大道）」という匾額を大成殿に挙げた。[80]更に民国八年に李埰が孔子廟に従祀された。そして公的な祭祀として中華人民共和国成立直前の一九四八年旧暦八月二七日、北京市局によって盛大な孔子崇拝儀礼（釈奠）が行なわれ、更に二〇〇二年九月の孔子生誕二五五三年に行なわれた孔子祭典に於て楽生四五人、舞生三六人で六佾の舞が行なわれた。[81]

この様に北京孔廟は元、明、清の皇帝祭祀場所であり、明の永楽元年（一四〇三）には北京孔廟が国子監孔子廟と改称され、[82]乾隆二年（一七三七）には黄色の琉瓦にふきかえられた。また民国に入っても国家祭祀としての色彩が強

く、この点に曲阜孔子廟と異なった北京孔廟の性格を見ることができる。

つまり、曲阜孔子廟は(1)孔子家の家廟として　設けられたが、漢以降(2)家廟の要素を残しながらも国家的な性格が強くなった孔子廟[83]と考えられ、中世までは他の孔子廟の基準となったのに対し[84]、北京孔廟は創設時より国家によって行なわれた科挙、特に皇帝の祭祀場所という性格が強い、といえよう。[85]

従って北京孔廟はそれまでの曲阜孔子廟を範とした孔子廟とその構造を異にするのは当然の結果で、曲阜孔子廟[86]の第六院落の奎文門を先師門とし、第六院落を前院に、第七院落の中央部を本院に、第八院落の東側を後院とした構成になっている。つまり、後院が(1)の孔子家の家廟としての性格を残しているとはいえ、これは明代創建によるものであり、北京孔廟は孔子廟の公的な空間としての場所を中心としたものであったことがうかがえる。そしてその創設を唐の貞観年間（六二七～四九）の初期にまでさかのぼると考えられる長安孔子廟が中世的な孔子廟[87]とするならば上海文廟は近世的な孔子廟[88]にあたると考えられること、[89]及び孔廟形式の(ハ)の右廟左学、また欞星門、大成門、大成殿、崇聖祠という構造を考えると、[90]北京孔廟は中国の近世孔子廟を代表し、東アジアの孔子廟にも影響を与え、かつ曲阜孔子廟と並んで孔廟文化を担ったものと考えられる。

以上、北京孔廟を中心として、孔子廟研究に於ける意味づけを行なったのであるが、孔子廟と釈奠、科挙等の関係について論述することは、学説史を中心とした儒教研究と違って、儒教とは何か、儒教がどの様なあり方をしたのか、特に儒教とその社会の持つ特質と教育のあり方、釈奠を通しての儒教儀礼の持つ意味の解明になる、と思われる。従来、こうした問題を北京孔廟を通しての解明が行なわれて来なかった様に思うので、それなりの意味があったのではないか、と考えている。

注

(1) 儒学とは儒教については論議があるが、本稿に於ては所謂孔子を中心とした教学がどの様なあり方をしたのか、という問題を孔子廟を通して論述したい。したがって儒学と異なる、という意味で儒教という立場をとっている。そうした意味で、加地伸行著『沈黙の宗教――儒教』(筑摩書房　一九九四年)は好著である。

(2) この問題については、君塚大学「儒教文化の概念規定――社会学からの試み――」(『仏教大学総合研究所紀要』第六号　一九九九年)がある。

(3) 範小平著『中国孔廟』(四川文芸出版社　二〇〇四年)二〇五ページ

(4) 李剣波　楊韻蓉編集『中国孔廟保護協会論文集』(新華書店　二〇〇四年)張柏　序言

(5) 張樹賢篇輯『北京孔廟』(首都博物館　二〇〇一年)八ページ

(6) 中野江漢「孔子廟」(氏著『北京繁昌記』(東方書店　一九九三年))、但し、初版は醒中印刷社　一九二二年)

(7) 花岡伸之作著『北京槩観』(市山重作発行　一九〇七年)、宇野哲人著『支那文明記』(大同館　一九一二年)、村上知行著『北京(名勝と風俗)』(東亜公司　一九三四年)等

(8) 元上海嘉定博物館副研究員　劉楚邕氏のご教授による。

(9) 崇聖祠、大部分の碑亭は未開放であった(詳細は注(21)・(25))

(10) 北京孔廟の構成については『欽定国子監志』巻一　廟志、『欽定日下旧聞考』巻六六、六七　官署国子監　斉心編『北京孔廟』(文物出版社　一九八三年)参照

(11) 佐田弘治郎編輯発行『濟南旧蹟志』(南満州鉄道株式会社　一九二七年)八一ページ

(12) 孔祥林著　秦春芳訳『中国、朝鮮、ベトナム、日本の孔子廟制度の比較』(論語普及会　二〇〇五年)六ページ、及び注(3)一二八ページ

(13) 詹躍華　金沛霖編著『北京国子監』(首都博物館　二〇〇四年)三九ページ

(14) 中野江漢「孔子廟の名称と起源」(「北京週報」大正一三年〔一九二四〕四月一二日号)

(15) 注(10)『欽定国子監志』巻二八、「大徳六年、文宣王廟を京師に建つ」、「(大徳)十年、廟成る」とあり、また延燮等纂『北京市志稿(文教志上)』(北京燕山出版社　一九九八年)にも「(大徳)六年六月甲子、文宣王廟を京師に建つ」、

「(大徳) 十年秋八月丁巳、京師文宣王廟成る」とある。この場合、大徳六年はハラハスンの建議によって北京孔廟の建設が決定し、十年竣工と解するのが良い、と考えられる(駱承烈著『歴代帝王与孔子』〔山東友誼出版社　一九九九年〕七七ページ)。

尚、注(3)の範小平氏も同一であるが(四一ページ、及び六二ページ)、中野江漢氏は前掲書に於て、現在の北京孔廟は至元一〇年(一二七五)建立と考察している(一三一ページ)。

(16) 注(7)村上知行著書　一七八ページ、及び林富喜子著『北京の思い出　古金襴』(春秋社　一九三九年)一〇四ページ

(17) 注(3)四四ページ

(18) 孔徳懋口述　柯蘭筆記　相川勝衛訳『孔家秘話――孔子七十七代の子孫が語る――』(大修館書店　一九八九年)では院落という言葉を使用している(二八一ページ)。

(19) 中野氏は注(6)前掲書に於て、(A)廓外　(B)前廓　(C)後廓　とし、(B)が前院、(C)が本院　にあたるため、(C)に啓聖祠が含まれていず、筆者と意見を異にする。尚、曲阜孔子廟は九院落から構成されているため、北京孔廟の院落とは異なる。(付図　曲阜孔子廟図　参照)

(20) 高明士「治統廟制と道統廟制との消長――秦漢より隋唐までの考察を中心として――」(西嶋博士追悼論文集『東アジア史の展開と日本』　同編集委員会編　山川出版社　二〇〇〇年)

(21) 碑亭の建立については、孔廟和国学管理処　社教部副主任　董艶梅氏のご教授による。

(22) 石鼓文については、前掲　注(10)『欽定日下旧聞考』巻六八～巻七〇　参照

尚、石鼓文の研究については小南一郎「石鼓文製作の時代的背景」(『東洋史研究』第五六巻第一号　一九九七年)参照。

(23) 下中邦彦編集『書道全集　第一巻』(平凡社　一九六五年)四四～四五ページ

(24) 何平著『中国碑林紀行』(二玄社　一九九九年)一四八～一四九ページ

(25) 二〇〇六年は工事中のため調査不可能であったが、もう一つの理由として未解放の問題があげられる。二〇〇二年の調査時に於ては本院の碑亭十一の内、九亭が未解放であった。

(26) 首都博物館　中国教育図書進出口公司編著『孔子――紀念孔子誕辰二五四〇周年』(同公司　一九八九年)一六三ペ

ージ

(27) 浅野裕一著『孔子神話――宗教としての儒教の形成――』(岩波書店　一九九七年)二五六～二六四ページ

(28) 坂出祥伸「「気」の道教神像の形成」(『文芸論叢』四二号　一九九四年)

(29) 小島　毅「儒教の偶像観――祭礼をめぐる言説――」(『中国――社会と文化』第七号　一九九二年)

(30) 注(27)二六三ページ

(31) 魯迅が民国時代、県毎に孔子廟があったが孔子像がなかった実状を語っており、少なくとも民国中頃までは基本的にはなかった様である(魯迅「現代支那における孔子様」(『改造』第一七巻六号　一九三四年))。

(32) 佐藤廣治「釈奠に就いて(下)」(『芸文』第一三年第一一号　一九二二年)及び南京工学院建築系・曲阜文物管理委員会合著『曲阜孔廟建築』(中国建築工業出版社　一九八七年)五四ページ

(33) 曲英杰著『孔廟史話』(国家出版社　二〇〇四年)一〇五ページ

(34) 注(7)宇野哲人著書　六六ページ

(35) 清時代の従祀者については、注(10)『欽定国子監志』巻四、また民国初期の様子は、注(6)参照

(36) 注(26)一九六ページ

(37) 洪欣責任編輯『首都博物館』(北京燕山出版社　一九八七年)三ページ

(38) 二〇〇二年の調査時は未解放のため、また二〇〇六年の時は工事中であったため、調査不可能であったが二〇〇六年の時に於ても全く従祀はされていない、ということであった(董艶梅氏のご教授による)。本文は注(6)と董艶梅氏のご教授によって記述。

(39) 注(15)『北京市志稿(文教志上)』一二八ページ

(40) 同右　一四〇ページ

(41) 注(3)六五ページ

(42) 注(33)一〇五ページ

(43) 南北両監の他に洪武三年(一三七〇)に中都(安徽省鳳陽府)に中都国子監が中都国子学として建立された。一五年に中都国子監と改められ、二六年に至って廃止され、その師生は京師(南京)の国子監に併入された(谷　光隆「明代監

生の研究(一)――仕官の一方途について――」(『史学雑誌』第七三編第四号　一九六四年))。従って明初には三監が存在した。

(44) 注(33)一〇六ページ

(45) 林田慎之助著『北京物語』(集英社　一九八七年)一四一ページ

(46) 田浩「金代的儒教――道学在北部中国的印述」(『中国哲学』第一四輯　三聯書店　一九八八)、及び若松信爾「金代に於ける道学の展開」(『東洋文化』三〇九号　一九九五年)

(47) 注(26)一八〇ページ

(48) 注(15)『欽定国子監志』及び『北京市志稿(文教志上)』による。

(49) 元北京孔廟文物管理処・外室部主任　副研究員　袁世貴氏のご教授による。

(50) 董艶梅氏注(21)のご教授と文献確認による。尚、咸豊帝、光緒帝は孔子を祭る礼を行なったのに止っている(注(15)『北京市志(文教志上)』)。

(51) 注(3)五二ページ、及び一四〇ページ

(52) 森　紀子著『転換期における中国儒教運動』(京都大学出版会　二〇〇五年)一八三ページ

(53) 清代の釈奠については中野江漢著『釈奠』(東亜研究会　一九三五年)二九～三二ページ　参照

(54) 拙稿「孔子廟と釈奠について――儒教の宗教性についての一考察――」(『関西大学中国文学会紀要』第一六号　一九五五年)参照

(55) 王勇著『唐からみた遣唐使』(講談社　一九九八年)二〇八～二〇九ページ

(56) 宮崎市定著『科挙――中国の試験地獄』(中央公論社　一九六三年)一四七ページ

(57) 平田茂樹著『科挙と官僚制』(山川出版社　一九九七年)三二～三九ページ

(58) 何力著『北京的教育与科挙』(北京出版社　二〇〇〇年)六〇ページ

(59) 注(56)

(60) 宮崎市定「元朝治下の蒙古的官僚をめぐる蒙漢関係」(『宮崎市定　アジア史論考　下巻』(朝日新聞社　一九七六年))

(61) 大島立子著『モンゴルの征服王朝』(大東出版社　一九九二年)二一五ページ

(62) 牧野修二「元代の儒教教育――教育課程を中心にして――」(『東洋史研究』第三七巻第四号　一九七九年)
(63) 高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』(吉川弘文堂　一九九九年)六〇ページ
(64) その様子は愈玉儲　孫薇訳「清代における中国と琉球の貿易についての試論」(『第一回　琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』一九九三年)に詳細に論じられている。
(65) 秦国経　孫薇訳「清代国子監の琉球官学について」(所載は　注(64))
(66) 琉球における孔子祭祀及び学校については糸数兼治「琉球における孔子祭祀の受容と学校」(『国立歴史民族博物館研究報告』第一〇六集　二〇〇三年)参照
(67) 梅根　悟監修　世界教育史研究会編『世界教育史大系3　日本教育史Ⅲ』(講談社　一九七六年)所載「特殊研究――沖縄教育史――独自性の確認過程――」二六八ページ
(68) 林　友春著『近世中国教育史研究』(国土社　一九五八年)一二ページ
(69) 筆者の現地調査(二〇〇二年)、及び飯田須賀斯「江戸時代の孔子廟建築」(福島甲子三編『近世日本の儒学』岩波書店　一九三九年)
(70) 図は筆者の現地調査(二〇〇一年八月)及びフォン・ツアン・アン著『フエの遺跡』(ツアン・ホア社　二〇〇〇年)一四五～一四六ページ　を参照にして、孔子研究院　礼祥林氏のご教授を経て作図したものである。
(71) 注(12)一七ページ　尚、ハノイ文廟図については、拙稿「ヴェトナムの文廟について――ハノイ文廟とフエ文廟を通してのヴェトナム儒教についての素描――」(『関西大学中国文学会紀要』第二五号　二〇〇四年)参照。
(72) 北京孔廟と科挙とが深い関係にあることについては、注(58)七八ページ　参照。
(73) 李申著『中国儒教史　下巻』(上海人民出版社　二〇〇〇年)一〇五五～一〇五七ページ
(74) 小林壽彦「「孔教問題」覚え書き」(山本博士還暦記念東洋史論叢編纂委員会編『山本博士還暦記念　東洋史論叢』山川出版社　一九七二年)及び張衛波著『民国初期尊孔思潮研究』(人民出版社　二〇〇六年)一七〇ページ
(75) 竹内弘行著『中国の儒教的近代化論』(研文出版　一九九五年)第四章　康有為の孔子教　参照
(76) 注(52)一八四～一八五ページ
(77) 桑原隲蔵「支那の国教問題」(『桑原隲蔵全集　第一巻』岩波書店　一九六八年)(但し、氏は儒教を宗教として扱う

ことに反対の立場をとっている〕、及び　注(52)一八六ページ

(78)　民国時代の釈奠については、注(53)三六～四一ページ

(79)　李宗一著『袁世凱伝』(中華書局　一九八〇年)二九五ページ、及びJ・チェン著　守川正道訳『袁世凱と近代中国』(岩波書店　一九八〇年)二三〇ページ

(80)　注(3)六八ページ、及び一四一ページ

(81)　注(3)六八ページ、及び一六七ページ

(82)　注(15)『北京市志稿(文教志上)』九〇ページ

(83)　黄進興著『優入聖域：権力、信仰與正常性』(允晨文化実業股有限公司　中華民国八三年〔一九九四〕)一七二ページ

(84)　注(3)三六ページ、及び三八ページ

(85)　範小平「中国孔廟発展及演変事情概略」(隗瀛涛主編『孔学孔廟研究』〔巴蜀出版　一九九一年〕)

(86)　曲阜孔子廟については末尾の附図　参照

(87)　路遠「西安孔廟歴史溯源」(所載は　注(4))

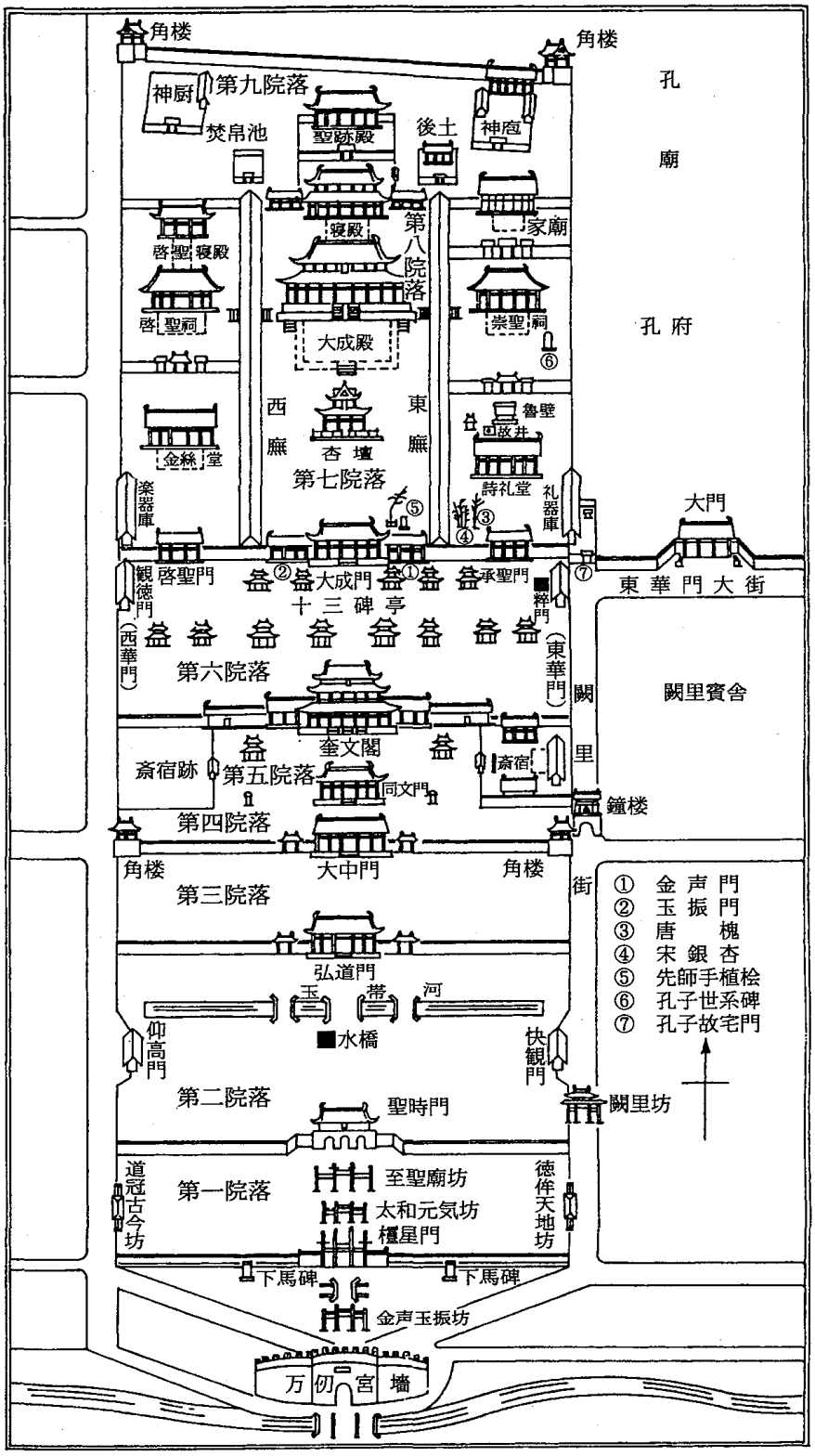
尚、民国中期の西安孔子廟の様子については、関野　貞「西安文廟及び碑林」(氏著『支那の建築と藝術』〔岩波書店　一九三八年〕)参照

(88)　注(3)三八ページ

(89)　注(3)四五ページ　尚、上海文廟は元の至元三一年(一二九四)創立である。

(90)　清末(同治元年　一八六二)の上海文廟の構成図については、日比野輝寛著『敖朮録』(『幕末明治中国見聞録集成第一巻』〔ゆまた書房　一九九七年〕)九八～九九ページ　参照

曲阜孔子廟図



孔徳懋口述・柯蘭筆記　相川勝衛訳『孔家秘話――孔子七十七代の子孫が語る――』（大修館書店　1989年）より。但し、筆者にて院落を加筆した上、一部修正。